

アカマツは、島根県内の里山で最も多く見られる木でしたが、最近では松くい虫の影響でかなり少なくなってきました。人の影響が少なかった大昔には、アカマツは岩角地の尾根筋などにわずかに自生していたと考えられていますが、人の影響が大きくなった室町時代ごろからシイやカシなどの常緑樹の伐採跡地にアカマツが繁茂しはじめ、現在のような植生になったといわれています。

アカマツは高さ25～30mになる常緑針葉の高木で、北海道南部から九州まで広く分布しています。また、朝鮮半島や中国東北部にも分布しています。

アカマツの名は、樹皮が赤っぽいところから名付けられています。一方、クロマツは樹皮が灰黒色をしているところからその名がつけられています。わが国では、アカマツとクロマツがマツの代表的なものですが、この2種は樹皮の色以外にも違いがあります。アカマツの葉は手のひらで先端からたたくように触ってみてもあまり痛く感じませんが、クロマツの葉は太くて堅く、触るととても痛く感じます。このようなところから、アカマツのことを「メマツ」、クロマツを「オマツ」と呼ぶこともあります。冬芽の色にも大きな違いがあり、アカマツは赤褐色ですが、クロマツは白色をしています。また、アカマツは里山や奥山にふつうに分布していますが、クロマツは一部を除き海岸部に多く分布しています。ちなみに、島根県の県木はクロマツです。

アカマツとクロマツは花をつける時期が違う（クロマツが早い）ため、ふつうは交配しませんが、中には自然交配したアイグロマツやアイアカマツも見られます。



▲ アカマツとクロマツ（左下）の冬芽の違い



▲ クロマツ（左）とアカマツ（右）の雄花